
カラカラ

境康隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラカラ

【Nコード】

N06920

【作者名】

境康隆

【あらすじ】

砂漠で男は乾いていた。そうカラカラだった――

その男は乾いていた。喉が渴いたのではなく、男そのものがカラに乾いていた。

砂漠を旅していた男は、あるはずのオアシスがなく、早々に干上がっていたのだ。

その身に栄養を蓄える彼の四本足の相棒は、そんな彼に暢気についてくる。

恨めしい。いや、羨ましい。

男は素直にそう思う。そしてそんな単純な思考すら、朦朧とする頭ではなかなか一つの形を結ばない。

もはや何度も底を傾けた、カラカラの水筒に彼は口をつけた。

もちろんとうの昔に、その皮の水筒は空になっている。

知ってはいるが、彼はばおっとする意識で、ありもしないはずの水を求めてしまう。

行動が理論的でなくなってきたのだろう。

頭だけではなく、体も言うことを聞かない。

彼は震える手で水筒を戻そうとする。

水筒は降ろされた手の勢いのままに、砂漠を転がっていった。

——ポチャン……

信じられない音が、その転がった先から聞こえた。

「あなたが落としたのは、この皮の水筒ですか？ それともこの金の水筒ですか？」

水筒が転がった先、紛うことなき泉から、女神と見紛う女性が現れた。

女性は両手に二つの水筒を持っていた。そして泉から浮き上がるように立っていた。どう見ても普通の女性ではない。

「……」

男は信じられない。

「どうしました？」

女神はにこやかに話しかけてくる。

「……」

男は駆け出した。方々の砂に足を取られ、最後の水氣を使い切るかのように、息荒く駆け出した。

彼の相棒が暢気に後をついてくる。

「……」

男は泉の際に無言でひざまずく。

信じられない。

先程までこんな泉はなかったはずだ。天の助けと、男は脇見もふらずその泉に口をつけようとした。

「私は訊いているのですよ。あなたが落としたのは、皮の水筒ですか？ 金の水筒ですか？」

女神がそう言うと、男の体が固まってしまふ。

泉を前にしてカラカラの男の、カラカラの体が固まってしまふ。

「……」

男が喉の渴きを押しして何か言おうとするが、それは音となって現れなかった。

その隣では、男の相棒が暢気にその水に口をつけている。

「さあ。どちらですか？ 皮の水筒ですか？ 金の水筒ですか？」

「……」

男は女神を見上げる。正直言つて、やっと意識がいった女神だ。

女神はどうやら、男の落とした水筒がどちらかを訊いているらしい。もちろん男が落としたのは皮の水筒だ。だが金の水筒の方が、どう見ても大きい。沢山水を入れられそうだ。

男の相棒は暢気に水を飲んでいる。

今すぐ水を飲みたい。そしてできることなら、沢山持ち出したい。だが男は女神の力のせい、体がまるで動かせない。

「さあ、どちら？」

「……」

女神の質問に答える為にか、男は辛うじて目と口だけ動く。目が合うと女神は更にニコツと微笑んだ。

だが喉の渇きのせいで、まるで言葉は口について出てこない。

「さあ？」

女神は何処までもにこやかに訊いてくる。

「……」

男は考える。今すぐ水を飲みたい。本当はそれだけしか考えられない。

だが女神の質問に答えないと、体そのものが動かないようだ。

男が落としたのは、皮の水筒だ。間違いない。

だが沢山水が入りそうなのは、金の水筒だ。

金そのものの価値より、その大きさに男は心惹かれる。

この砂漠では、まさに今乾いている状況では、金より水なのだ。

「……」

男はなけなしの唾を口中に溜める。

そして何とか口を開いた――

「正直な方ですね。ではこちらの金の水筒を差し上げましょう」

女神はそう言うと、金の水筒を差し出した。

男の体が不意に動き出す。

女神の声も無視し、男は泉に口をつけようとした。

金の水筒を掴んだ腕も、沈めんばかりの勢いで泉に突っ込んだ。

だがその泉が、満足げに微笑む女神とともにスツと消える。

金の水筒が男の面前で、ザクツと乾いた音を立てて砂にめり込んだ。

「……」

カラカラの男は、無駄に大きい金の水筒をカラカラと鳴らして歩き出す。

一人満足げな相棒が、そんな男についていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0692o/>

カラカラ

2010年11月13日14時34分発行